気仙沼・舞根湾に蘇る生き物たちに学ぶモニタリング調査

青翔開智中中学校高等学校　松永悟郎

①調査での気づき

防災の視点で見ると、街はとても綺麗に整備されて、いたるところに高い防波堤が建てられており、2度と同じような悲劇がおきないように徹底した対策がされている。一方、生態系の視点でみると、山と海がはっきりと分断されているということは、陸と水の双方の資源を活用できて、多様な生物が生息できる場所である岸辺を人為的に破壊しているということになる。1つの視点で事象をみてわかった気でいると、大きなことを見落としてしまうことに気がついた。

②調査内容で得た知識を応用した授業実施の概要

中学1年生の授業のまとめとして、防災と生物多様性の視点を提示して、何を大切にして行動したらいいのかを考えることを目的とした。まず、東日本大震災津波伝承館で見た内容を共有して、地震の恐ろしさを共有し、その後、今の気仙沼がどうなっているか、4枚のを提示した。その後この写真で疑問に思ったことを出し合い、「防波堤を建てることで引き起こされること」をループ図を用いて議論した。

③授業実施時の子どもたちの反応や感想

最初は防波堤について肯定的な意見がほとんどだったが、授業後は意見が割れていた。「津波対策は大切だと思っていたけど、それが原因で生き物の生活環境が破壊されていると知った。何が正しいのかわからなくなった。」という感想が多く、疑問をもった状態で授業を終えた様子だった。

④授業を実施してみた先生自身の感想

一つの視点から物事をみるのではなく多くの視点から見ることの大切さ、社会は複雑なシステムであり多くのものがつながって相互に影響を与え合っていること、を考える上で良い教材だと感じた。また、授業後も考え続けてもらえる内容になった。

⑤ご自身の体験を語ることによる子どもたちの学びへの影響について一言

大人でも何が正しいのかわからないことが課題だったので、普段の授業とは違い生徒は困惑した様子だった。一方、社会課題は全て何が正しいかわからないから課題になっていることなので、その内容について対話することの重要性を伝えるためにはよい内容だった。